

『十六夜日記』論

—注釈の方法に触れつつ—

森 田 兼 吉

—

「十六夜日記」は次のように書き出されている。以下日本文は江口正弘氏編「十六夜日記校本及び索引」の校本の底本となっている永青文庫本により、私に句読点、濁点をつけた。

昔壁の中よりもとめいでたりけん文の名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身のうへのことゝはしらざりけりな。水くきの岡の葛原かへすくもがきをく跡たしかなれども、かひなき物はおよのいさめ也。又賢王の人を捨給はぬ政にももれ、忠臣の世をおもふ情にもすてらるゝものはかすならぬ身ひとつなりけり、と思ひしりなば、又さてしもあらで、猶此うれへこそやるかたなくかなしけれ。さらにおもひつゞくれれば、やまと歌のみちはたゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。日の本の国にあまのいは戸ひらけし時より、四方の神たちのかぐらの岡をはじめて、世をさめものをやはらぐるなかだちと成にけるとぞ、此みちのひじりたちはしるしをかれたる。さても又集をえらぶ人はためしおほかれど、二たび勅

をうけて世々にきこえあげたる家はたぐひ猶ありがたくや有けむ。…… (傍線等筆者)

傍線部Bの「水くきの岡」についてまず考え、この日記の注釈のあり方を検討することから小稿を進めていきたい。

「水くきの岡」はすぐ「の葛原」と続いて「かへすく」を呼び起こす序詞となっているのだが、この「水くきの岡」とはいったいなんだろうか。この日記の最もはやい(そして最も詳密でもある)「十六夜日記残月鈔」では、

水茎は岡の枕詞也。草木の茎のみづしきより、瑞茎の若とつゞけしにて、わとをく通はせいふなるよし、宣長が玉勝間ノ一にいへり。

として「万葉集」の歌二首と「古今和歌六帖」の一首をあげ「新拾遺春上、夫木雜十四など、そのほかものにあまたよめり」と結んでいる。その「万葉集」の二首を武田祐吉氏の「万葉集全註釈」の訓みによってあげよう。

雁がねの寒くなきしゆ水茎の岡のくず葉は色づきにけり

(一〇、二〇二八)

水茎の岡の葛葉を吹きかへし面知る児らが見えぬ頃かも

(一一、三〇六八)

共に作者不明の歌である。この「水くきの」を「岡」の枕詞とする考え方は、その後の注釈でもまったく疑われることなく踏襲されて今日に至っている。たとえば、この日記の最も新しい注釈書である森本元子氏の「十六夜日記・夜の鶴 全訳注」でも、「水くきの」は、「万葉集」以来「岡」の枕詞として用いられた。

と注釈されている。管見に入ったものの中ではただ一つ、江口正弘氏他の影印校注古典叢書の「十六夜日記」が、

「水くき」は「岡」の枕詞で、一方「筆」の意も含めて「書きおく」の縁語とした。

と、枕詞であることを注しながら、すぐ続けて「水茎岡（易林本節用集）」の例をあげているのは、注自体に矛盾をきたしているものの注目される。

『万葉集』には「みづくきの岡」が五例あるが、これらの歌で「みづくきの」が「岡」の枕詞であることに疑問はない。しかし、阿仏尼が「十六夜日記」を書いた鎌倉時代中期の頃、人々は「水くきの岡」をどのようなものとして把握していたであろうか。鎌倉時代末の成立といわれている澄月の「歌枕名寄」を見ると（古典文庫所収の万治二年の刊本による）、卷三十七末勘国上に「水茎岡」をあげ、まず次のような注を加えている。

八雲御抄近江云々。範兼卿禾勘国、或云土佐国云々。裏書云、今案云、古今集近江ぶりみづくきぶり並て載之。然者水茎岡屋

形即近江歌。随兼氏卿之現存六帖りうだんをかかせる哥「かきとむるあふみぶりうたむかしよりいままかはらず水くきの跡」如此詠は水茎岡即近江振と存歌。但可尋之。

ここでは水茎岡は地名であり、歌枕であって、近江か、土佐か、その所在についての論がなされているのである。そして順徳天皇（一九七〜一二四二）の「八雲御抄」もこれを地名と見ていたのである。「歌枕名寄」には前掲の『万葉集』の二首も地名と解釈して都合十九首の例歌をあげている。その中でとりわけ注目されるのは、阿仏の亡夫為家の歌と定家の二首の歌とである。為家の歌は、いかにして手にだにとらぬ水茎の岡辺の雪にあとをつくらんという歌で、次のような左注がつけられている。

右一首、老後病にしづみて侍し冬の夜、前大僧正道玄、人々あまたともなひ来りて、題をさぐりて哥よみ侍し中に、岡雪といへることを読侍しを、筆をとる事かなはず侍て、為兼少将に侍し時かゝせて出し侍云々。

今のところ出典を明らかにしえない逸話である。「公卿補任」正応二年（一二八九）の条によれば、為家の孫為兼は文永五年（一二二六）十二月二日に右少将に任じられている。建治元年（一二七五）十月八日に左少将に任じられる少し前の五月一日に為家は七十八歳で薨じているから、為兼少将時代というこの冬の日のことは、文永五年から同十一年（一二七四）の七年間のうちの一日であったことが知られる。病いに沈んでいた為家のもとに前大僧正道玄が人々を伴い訪ねて来て、題を探り、歌を詠んだ。為家の病いはかなり重いようで、客人が歌の会を所望するのは遠慮するはずで、為家側の強

い要望によって試みられたのであろう。風雅に徹する為家の姿が浮かんでくる。しかし、「岡の雪」という題を探り取って詠作したものの、為家は筆を取る力がなく、為兼が代筆したものがこの「いかにして」の歌であったという。

岡の雪ということばから為家の頭に浮かび詩心を動かしたのは、数ある岡の中からの水荃の岡なのであった。水荃の岡と雪とは必らずしも密着した素材ではない。為家の頭にはおそらく父定家の「拾遺愚草」に見える建保三年（一一一五）九月十三日の「内大臣家百首」のための詠百首和歌の内、

岡雪

けさは又跡かきたゆる水くきの岡の屋かたの雪のふりはも

（私家集大成中世Ⅱ 一一四九）

があつたのであろうが、為家の水荃の岡への関心の並々でなかつたことがわかる。そしてこの冬の夜、為家のそばにはおそらくは阿仏がいた。晩年の為家が阿仏と暮らしていたことは「源承和歌口伝」や文永六年（一一二九）の秋から冬にかけての為家の山荘での日々を活写した飛鳥井雅有の「嵯峨の通ひ路」などによってわかる。源承が批難しているように、病人を置いて出かけ朝帰ってきたというようなこともたまにはあつたかもしれないが、道玄の訪れたのがそのような日に当たっていたという蓋然性はきわめて少ないだろう。となれば、水荃の岡を詠んだこの為家の歌は、阿仏にとつては感慨の深い、忘れがたいものであつたはずである。「水くきの岡の葛原かへすくもかきをく跡たしかなれども」という文を、阿仏は、為家のこの歌を思い出すことなく書くことなどできなかつたのではな

「十六夜日記」論 — 注釈の方法に触れつつ —

かろうか。

「十六夜日記」で「葛原」は、江口正弘氏の校本によれば、残月鈔本・群書類従本・学習院大学蔵本・慶応義塾蔵本・三宅文庫本の五本が「くす葉」としている。「十六夜日記残月鈔」の場合は「くす葉」の本文を立て、「原本、金吾本、作くすハラ、伊本作葛葉ハ」と注記しているから、小山田与清が本文を定めるに当たって、底本にした万治二年板本（原本）の「くすハラ」を積極的に改めたのである。「葛原」の本文を持つ九条家旧蔵本を底本としながら、玉井幸助氏の「十六夜日記評解」が「葛葉」の本文を立てているのも、小山田与清に近い。葛の葉が秋風にひるがえり、裏がえしになって葉裏の白さを見せる。「かへすく」に続く語としてはたしかに「葛葉」の方が自然のようにも思える。しかし主要な伝本も含めて諸本の大部分は「葛原」であり、本文論としてはその方に分があるといわざるをえないのである。そこで浮かび上がってくるのが「歌枕名寄」が引いている定家の歌の一首である。「千五百番歌合」からの引用なので、そこから古典文庫本によって引こう。五百四十四番の右で、勝となつた歌である。

みづくきのおかのくす原吹返し衣手うすき秋のはつ風

いくつかの葛の葉を裏返すのではない。水荃の岡に広がる葛原にかなり強い秋風が吹いて、原全体をざわめかせ、葛の葉を一斉にひるがえす。視野一面にざわめき、ひるがえり、葉裏の白さを見せる葛原があつて、衣の袖を薄いと感じさせるほどの秋の初風の強さや冷たさをきわだたせているのである。「水荃の岡の葛原」という句を持つ歌は、「歌枕名寄」「平安和歌歌枕地名索引」「新編国歌大観」

の第一・二巻を検索しても、この定家の歌の他には「夫木和歌抄」五八三〇の、「家集」という詞書を持つ丸の、

秋風の日ごとに吹けばみづくきのをかのくずはいろいろづきにけり

しか見出せない。この歌は本来「万葉集」巻十の二一九三の歌で、「柿本集」(『私家集大成中古』人麿Ⅱ一〇五)「拾遺和歌集」の第二異本(一一一四)にも見えるが、いずれも第四句は「岡の木の葉は」であり、「葛原」の形は「夫木和歌抄」の改変かと思われる。阿仏尼の没後の歌集でも。「十六夜日記」の「水くきの岡の葛原」は為家の父定家の歌をも意識した表現だったのであろう。

阿仏尼の「十六夜日記」の旅は、周知のように、夫為家の遺領細川荘の相続をめぐる訴訟のための関東下向だった。為家が長男為氏に譲ることにしていた所領の内細川荘を、為氏に不孝があったとして悔い返し、老いてからの妻阿仏との子為相に与える旨の状を作ったのだが、為家の死後為氏は相続権を行使しようとして譲らず、訴訟に持ち込んでいたのである。そして、それはまた同時に、定家から為家に伝えられ、現在は多くの多くを阿仏が保持している歌書等の書物の所有権の正当性をめぐる争いであり、伝来の歌書を譲られたことから必然的に導き出される、御子左家の歌道の真の継承者として阿仏・為相を位置づけるための争いでもあるという一面をも持っていたのである。阿仏は、この論の最初にあげた文章にすぐ続けて、

其跡にしもたづきはりて、みたりのおのこ共、もちの歌のふるほどをも、いかなるえにかありけん、あづかりもたる事あれど、道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、ふ

かき契をむすびをかれしほそ川のながれもゆへなくせきとどめられしかば、跡とふ法の灯も、道をまぼり家をたすけむおや子の命も、もろともなきえをあらそふ。……子をおもふ心のやみは猶怒びがたく、道をかへりみる恨はやらん方なく……

と述べていて、その辺の事情を明確にしているのである。

『十六夜日記』で「水くきの岡の葛原」というとき、その「水くきの」はけっして「岡」にかかる枕詞などではなかった。あくまでも「水くきの岡」という名所なのである。水茎の岡は、「千五百番歌合」や「新古今和歌集」の頃から歌人達に好んで詠まれ、「建保三年十月二十四日内裏名所百首」などにはいる中世の代表的な歌枕であった。水茎の岡というだけで、歌の教養のある者はだれでも、秋風にひるがえる、(やや)色づいた葛の葉をすぐに思い起こしたであろう。まして阿仏にとっては亡父為家の思い出ともつながる。定家から為家へ、さらには為相やわが身へと伝えられた歌の道の正統性を主張する「十六夜日記」にあって、阿仏は亡夫の風雅に倣した姿を思い、定家の歌にも心を馳せて「水くきの岡の葛原かへすくもかきをく跡たしかなれども」と綴っているのである。

古典文学と現代の読者との間には、ことばの問題をも含めて、それぞれが立っている社会的、文化的基盤、その担っている社会的、文化的な伝統などの面で、大きな懸隔が存する。「十六夜日記」のような、個人の生活と信条・主張を表現している作品の場合は、時代の中での作者の特殊事情も、そこに加わる。注釈の基本的な意義は、その懸隔を可能な限りせよめようという試みでなければなるまい。「水くきの」は「岡」にかかる枕詞だという理解のし方では、

「十六夜日記」とわれわれとのへだたりは毫もせよめることができないのである。

そもそも、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ、情を尽してより、余はみな悱似かよひて、その糟粕を改むることあたはず。

(笈の小文)

とまで芭蕉に高く評価されながら、今日「十六夜日記」があまり読まれず、その評価もあまり高くない重要な一因として、「水くきの岡」の理解が表徴的に語っているような注釈の不毛が、作品と今日の読者との距離を縮めえていないことがあるのではなからうか。

小稿の最初に引いた作品の冒頭の傍線部ACについても述べておこう。

Aでは「昔壁の中よりもとめでたりけん文の名」が「古文孝経」を指すことは諸注が指摘している。その書物の名である「孝」の字を「今の世の人の子」(為氏を指す)は我が身にかかわることとはまったく知らなかったのだ、と阿仏は嘆ずる。為家の死後、亡父の遺言に従わなかった為氏を責め、嘆いているのだが、このくだりが、為家が一旦為氏に譲った細川荘を「条々称有_レ不孝、悔返_レ之」という事実と深くかかわっていることも指摘されねばなるまい。為氏が孝を知らないという断罪と詠嘆は、阿仏尼だけのものではなく、為家の思いでもあった。たとひ為家の為氏に不孝ありという言葉が、悔い返しのための形式的なものであったとしても、今回の訴訟ではおそらくは重要な論点であり、阿仏の文も意図的にそれによりかかっているのである。また、「古文孝経」については、定家の「源氏物語」の注釈である「奥入」(「源氏物語大成」巻七所収定家自筆本

「十六夜日記」論 — 注釈の方法に触れつつ —

による)の若菜の巻の注に、

懸車

古文孝経曰七十老致仕懸其所仕之車置諸廟……(下略。傍訓モ省イタ。)

とあり、「源氏物語」の注釈に利用されていることに注目したい。阿仏は「源氏物語」には造詣が深い。彼女が為家と結ばれたのは「源氏物語」の書写を手伝うために為家の娘後嵯峨院大納言典侍のもとに呼ばれていた(源承口伝)縁からであり、為家から「源氏物語」の講説も受けたらしい。雅有の「嵯峨の通ひ路」には、雅有が為家から「源氏物語」の講義を受けた日々が描かれているが、そこに、十七日、ひるほどにわたる。源氏はじめんとて、講師にとて、女あるじをよばる。すのうちにてよまる。まことにおもしろし。

よのつねの人のよむにはにす、ならひあべかめり。

とある「女あるじ」は阿仏である。「紫明抄」や「河海抄」などにも阿仏の所持本や阿仏説などが出て来て、阿仏はひとかどの源氏学者であった。定家から為家へ伝えられた源氏学の継承者としての自負を持っていたに違いない。そんな阿仏が源氏学_ニに必須の「古文孝経」の名を為氏は知らないといっていることになる。

傍線部Cについては、森本元子氏の「十六夜日記・夜の鶴 全訳注」(昭和五四年)に至ってはじめて、従来諸注の掲げる、

力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛きもののふの心をもなぐさむるは歌なり。

という「古今和歌集」の仮名序と合わせて、「新古今和歌集」仮名

序の、

…その道さかりにおこり、そのながれいまにたゆる事なくして、色にふけり、心をぶるなかだちとし、よをおさめ、民をやはらぐるみちとせり。

が指摘された。「世をおさめ」は「古今」にはなく、阿仏が「新古今」の序をも頭に置いて書いていることは疑問の余地がない。すぐ続く「此みちのひじりたち」は必然的に紀貫之だけではなく、「新古今」仮名序の作者藤原良経をも指すことになり、「新古今」の撰者の代表格である定家をも視野に入れての表現でもあったであろう。

傍線部ABCを以上のように見ていくならば、これらの表現の底にある、阿仏の夫為家や夫の父定家に対する思い、さらには、定家から為家に承継された和歌の道や源氏学の真の継承者であるという主張と自負が、はっきりと見えてくる。こうした思いは『十六夜日記』の序的な部分では、前に引いた「其跡にしもたづさはりて、みたりのおのこご共、もゝちの歌のふるほぐどもを、いかなるえにかありけん、あづかりもたる事あれど……」をはじめとして随所にでてくるのだから、別に新しい発掘ではない。しかし、そうした思いをそのままの形で記述していない部分にあっても、修辭の底に阿仏の思いの込められていることは注目しなければならぬ。Cなどは、本来は直截簡明な表現で、当時の文学意図者なら誰もが「新古今和歌集」の仮名序を想起し、定家にまで思いを馳せたのではないかと思うが、A Bなどについても、文学的教養の高い人は容易にそこに込められた阿仏の思いを読み取ることができたであろう。そしてその周回文章に感じ入ったことであろう。

「十六夜日記」の序段は、古歌・古典籍に拠り、歌ことばを用いて綴っている文が多い。後人の命名ではあるが、書名のよつてい

る、
ゆくりもなくいさよふ月にさそはれ出なんと思ひなりぬ。

が「源氏物語」夕顔の糸の、

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすら

ひ……

により、前途への不安を際立たせた表現であることはいうまでもない。そして「源氏物語」によつた表現はかなり多いのである。細川荘を為氏に押領されたため、

おや子の命ももろともにきえをあらそふ年月をへて、あやうく心ほそきながら、何としてつれなくけふまでながらふらん。お

しからぬ身ひとつはやすく思捨れども……

と嘆く部分で、「きえをあらそふ」は「源氏物語」御法の巻の光源氏の歌、

ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもかな

による表現であり、となれば「おしからぬ身」という類型的な表現も、同じ御法の巻の、

惜しからぬこの身なれどもかぎりとして新尽きなんことの悲しさという紫の上の歌を想起してのものである蓋然性は高い。こうした典拠のある語や歌ことばの多用という修辭は、一般的には、観念的で、求心力の乏しい文章を作る危険を多く持っているといえるだろう。「讃岐典侍日記」の序の部分などはそのような例といつてよ

い。しかし、「十六夜日記」にあつては、こうした修辭は、御子左家の歌道や源氏学の繼承者と主張する阿仏にいかにもふさわしい。その用い方も適切で、華麗でありながら力強く、この作品の文学的価値については否定的な風巻景次郎氏さえ「この序文は一読して深い感銘を感じさせられる」といわれ、「蓋しこの序文はその印象の強さに於て、俺はれない心情の率直な表現に於て鎌倉期を通じて有数の名文章である事を失はないと思ふ」と述べておられるくらいである。それは御子左家の歌道等の繼承者としての阿仏の主張が、形式の上だけでもことばの上だけでもなく、実質を具備していること——つまりは阿仏の並々なぬ教養と技倆の証明でもあつたのである。しかるに戦後のこの作品の注釈は——日本古典文学大系や日本古典文学全集などに収録されていないための注釈書の数の少なきもあるのだが——ことばの置き換えに重点がありすぎ、典拠の検索にはあまり意が用いられず、阿仏の用心意や努力、ひいてはこの作品の文章の魅力を解き明かすには遠いのである。森本氏の「全訳注」にはさすがに的確な新しい指摘も若干見られるけれども、概していへば江戸時代になつた小山田与清と北条時隣の「十六夜日記残月鈔」が、その豊富な引例の故に今日もなおこの作品を読み解く最も重要な注釈書なのである。

二

細川荘をめぐる訴訟のため阿仏が関東に旅立つた弘安二年（一七七九）当時、作者と為家との子為相は十六歳、為守は十五歳で、年齢不詳だがこの二人の上で僧籍に入っている定寛も為家との子であ

「十六夜日記」論——注釈の方法に触れつつ——

つた。御子左家の歌道・歌学の繼承者としての筆頭はもちろん長男為氏だが、阿仏はその為氏を、為家の遺言のことばを踏まえて「不孝」だと嘆息し、糺弾する。為相らを育て、教育し、自分が今預っている伝来の書籍・文書をも伝えて歌道、歌学の正統たらしむるところこそ為家から自分に課された任務だと、阿仏は述べているのである。為氏の不孝・横領によつて、親子の生活もあやうく、歌道のおとろえんことをも恨んでいる。母性愛の文学と「十六夜日記」を見る考えもあり、たしかに序の部分には母性愛的なものもうかがえる。するけれども、序の部分の主調音が、阿仏の立場なり正当性なりの主張と、その主張のなかなか認められぬ悲しみと恨み、不安な旅立ちの決意の表白などにあることは、間違いない。修辭もそうした目的に全面的に奉仕するよう周到に用意されていたのである。

それでは、この序の部分に続く鎌倉までの旅行記の部分には、作者のどのような心しらいがうかがえるであろうか。その部分は作品の中心を成すものではありながら今日の読者にはきわめて評判がよくないのである。昭和の初め、風巻景次郎氏は、

この部分は果して如何なる目的によつて書かれたものであらうか。先づ第一にこの部に至つて著しく感じられる事実の一つは、単調といふことである。我々は紀行の部に移つて後、粟田口鏡の宿、守山と進むにつれて漸く何か變化に乏しい形式的な感じを意識しはじめるであらう。そして、小野の宿、藤川、不破関、笠縫、洲俣、一宮と進んで来て、愈々単調の感は確定的なものとなつて了ふであらう。尾張熱田宮あたりから先になると、我々の印象はたゞ相似たものゝ連続を感じるばかりであ

る。そして永久に尽きざる如き感を抱かせる。この相似たもの、繰り返しが、逃れがたい力で読者の精神を倦怠の中に引き込んで行く。

と評され、後に大きな影響を与えた。目崎徳衛氏⁽⁵⁾は、東海道を下った執念と道筋の歌枕によせる詩心が少しも有機的に結びついていないとされ、「文学として、これはほとんど致命的ともいえそうである」といわれ、序の部分と紀行部分との関わりも問題なのである。

風巻氏は、この単調な感じの原因の一つはその形式にあるとされる。道の記の部分の文章はある単純な構造を持った、きわめて単純な形式を所有する単位の連続であつて、その単位とは、道中所々の名所宿駅の、短かければ一行、長くても数行にすぎない文章と、ここに関する一首、多くても二首の和歌とから成り立っていることが指摘されている。そして、作者の優秀な表現力は序文の文章の上に十分發揮されているのであるから、それは作者の文学的技巧の拙劣さによるのではなく、作者には、「文学的感銘を読者に与へるといふ事以外の何等か重要な目的が存して」いたのではないかとされ、「作者の目的が名所の歌のよき見本を作るに在った事は殆ど疑ふべき余地を有しないものゝやうである」という、有名な結論を導き出しておられるのである。

しかし、道の記の文章はそれほど単調で魅力に乏しいものであるうか。作者は歌のみに力を注ぎ、文章をないがしろにしているのであらうか。道の記の部分の歌と文章について検討してみよう。

さのみ心よはくてもいかにとて、つれなくふりすてつ。程なく

あふ坂のせきこゆるほども、

さだめなき命はしらぬ旅なれば又あふさかとのためてぞゆ

く
のじといふ所は、こし方行きき人も見えず。日は暮かゝりていと物かなしとおもふに、しぐれさへうちぞく。

打しぐれふるさとおもふ袖ぬれて行ききをき野路のしの

原

こよひはかゞみといふ所につくべしとさだめつれど、暮はてゝ行つかず。もり山といふ所にとゞまりぬ。爰にも時雨猶したひきにけり。

いとゞ猶袖ぬらせとややどりけんまなくしぐれのもる山にしも

けふは十六日の夜なりけり。いとくるしくてうちふしぬ。いまだ月の光かすかに残りたる明ばのにもり山をいでゝゆく。やす川わたる程、さきだちて行旅人のこまのあし音ばかりさやかにて霧いとふかし。

旅人もみなもろともに先だちて駒うちわたすやすの川ざり道の記の部分が和歌に力の注がれていることはもちろん確かである。序の部分に記載されている歌は、作者のものが五首、子ども達の歌が六首であったが、道の記の部分になる作者の歌は五十五首(写本により五十六首)と急増する(なお、序の部分と道の記の部分の使用行数の比は、永青文庫本で二・五弱である)。阿仏の本領は和歌にあり、当時すでに『続古今集』に三首、『続拾遺集』に六首が入っていた。御子左家の歌道を継承していると自負もしている。そんな彼女の旅である以上、和歌の詠作に重点の置かれるのは当

然であり、読者も阿仏の和歌にまず大きな関心を持ったであろう。

そして旅の歌となれば当然歌枕が関心事となる。歌枕・名所への関心は中世の歌人達にとってはきわめて強い。田尻嘉信氏の調査されたところによれば、「新古今集」に見える歌枕は三四国・二三三項、歌は五七六首歌枕の重出もあるので実数は四六六首である。「古今集」では二六国・一〇四項、二四六首というから、集の歌数の多少を計算に入れても、「新古今集」の名所歌の比率の方が大分高い。

「新古今集」の入集歌中歌枕を詠み込んだ歌の占める率の高い歌人も、筆頭が家隆で、定家、後鳥羽院、雅経の順で、撰集に関わった歌人達であることも興味深い。「十六夜日記」の当時の読者達も、名所・歌枕に関心が深く、阿仏の詠出する名所歌の世界に引き入れられたであろうことは想像にかたくない。歌だけに注目して読んで、文学的感銘は受けこそすれ、倦怠の中に引き込まれることなどなかっただろう。「打しぐれ」「旅人は」の二首が「玉葉集」巻八に採られているほか、道の記の部分から四首が「玉葉集」に入っている。為氏の血を引く二条家の手になる勅撰集に「十六夜日記」の歌が採られていないのはいうまでもない。

では文章はどうか。短いことは短いがけっして単調ではないだろう。逢坂の関、野路(の篠原)、鏡、守山、野洲川と名所・宿駅名が並ぶが、その文章は単なる説明ではなく、作者の心情と深くかかわっている場合が多い。先立って行く旅人の駒の脚音だけがさやかに聞こえる野洲川の朝霧の深さなども、実に印象深い叙景である。松本寧至氏は、「散文にも歌語を駆使した無駄のない文章である」と述べておられる。

廿一日八はしをいで、ゆくくに、いとよくはれたり。山もと遠きはら野を分ゆく。ひるつかたになりて紅葉いとおほき山にむかひて行。風につれなきところ、くち葉にそめかへてけり。ときは木ども、たちまじりて、あをちの錦をみる心ちす。人にとへば、みやちの山という。

しぐれけりそむる千しほのはては又もみぢのにしきいろかへるまで

此山までは昔見し心ちするに、比さへかはらねば、

まちけりなむかしもこえし宮ち山おなじ時雨のめぐりあふ世を

山のすそ野に竹のある所にかや屋の一見ゆる、いかにしてなごのたよりにかくてすむらんとみゆ。

ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてあたりさびしき竹のひとむら

「山もと遠き」「はら野」「すそ野」——これらは平安時代の文字にはあまり親しみのないことばである。都の内の生活から出て来ることばではない。はるかな山野の道を旅する体験の中から使われ出すようなことばである。「山もと遠き」の「山もと」だけで考えてみても、「古今集」二例のうちの一つ「わが庵は三輪の山もとこひしくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(九八二)は有名で、「かげろふの日記」にもこれによる歌句は見えるが、単独では「源氏物語」「枕草子」「更級日記」「浜松中納言物語」「夜の寝覚」などになく、「狭衣物語」に見える程度。勅撰集では「後拾遺集」「金葉集」各一例。それが「新古今」の二例以後はどの勅撰集にも必ず例が見えるよ

うになる。「玉葉集」と「風雅集」でひんばんに使われていることはすぐに思い浮かぶが、ざっとした調べで「玉葉集」に十三例、「風雅集」に二十四例が拾えた。中世の歌人達の好むことばだとかる。「山もと遠し」となると、勅撰集では為家らが撰した「続古今集」一六五六、

百首御歌の中に、野を

土御門院御歌

いなみのや山もととほく見わたせばをばなまじる松のむらだち

が初出。以下「玉葉集」に一例、「風雅集」(二例)からの五勅撰集にはどれにも用例が見られる。阿仏の時代に人氣がそろそろ出はじめた表現なのである。「すそ野」も「後拾遺集」「金葉集」が各一例。「千載集」四例。「新勅撰集」四例、「続後撰集」五例、以後はどの勅撰集にも見え、「玉葉集」(少なくとも七例)「風雅集」(少なくとも六例)好みのことばである。「原野」となるともつと珍しい。今のところ勅撰集からは、定家・為家が撰者をしている三勅撰集の四例と、はるか後の「新統古今集」の一例のみである。

あづさゆみすゑのはらのにとがりするきみがゆづるのたえむとおもへや

(新勅撰 八七〇 読人不知)

なが月のすゑのはらののはじめもみちしぐれもあへずいろづきにけり

(続後撰 四一六 法印良算)

契りおきしすゑのはらののものがしはそれともしらじよその霜がれ

(同 九三六 定家)
ぬれつつもしひてとがりのあづさゆみすゑのはらにあられふるらし

(続古今 六四二 道家)

いずれも「すゑの原野」の形である。「すゑの原野」は「新撰和歌六帖」や「夫木和歌抄」にも例がある。本来は「万葉集」卷十一の二六三八に「梓弓 末之腹野尔 鷹田為」(全法釈)と見えるもので、中世の歌人達によって再発見された歌枕である。「続後撰集」の二例などは「末の」が懸け詞として用いられ、「原野」が単独の語とも解せそうな使われ方をしている。阿仏が「原」でも「野」でもなく、ことさらに「原野」を用いたのは「すゑの原野」が頭にあつたからで、定家の歌などは特に記憶していたかもしれない。何しろ亡夫撰集中の亡失の父の歌である。

「山もと遠き」「はら野」「すそ野」は、今日の我々では何の注意も払わずに見過してしまうことばだが、当時の人々にとってはもっと違った意味を持っていた。それらは歌語であり、この時代の歌人達の美意識によって見出だされ、もてはやされだしたことはであった。「山もと遠きはら野を分ゆく」はこれ以上刈り込むことはできないほどの短い文でありながら、鮮明な印象を持っている。当時の読者達はその新鮮な用語に目を見張り、感動して、その描き出された世界のさらに奥まで想像のつばさを広げていったのではないだろうか。「風につれなき」は「国歌大観」の正統・新編の一・二を検索した程度では、「千五百番歌合」の四二三番の右惟明親王の歌で「玉葉集」にも入る(四〇二)、

ゆふまぐれ風につれなきしら露はしのぶにすがる螢なりけり
しか見出だせないが「風葉和歌集」に名が見え、一部が残っている
「風につれなき物語」もすでに成立している。和歌の表現で、文
章に緊張感を与えている。それに続く「あをぢの錦」の見立ては、
「周防内侍集」の、

いなりの行幸に、すぎのなかにいるこきもみちのみえしか
ば

いなり山すぎまのみちきてみればたゞあをぢなるにしきなり
けり
(私家集大成中古Ⅱ 四二)

が頭にあつたかもしれない。「十六夜日記」の道の記の文章には、こ
のような和歌のことはや和歌的な見立てがふんだんに採り入れられ
ている。それは表現を簡潔にし、的確鮮明な印象を与え、読者の想
像力をかきたててくれもする。並たいていの技倆ではできること
はないし、阿仏も十二分に意を用いて書いているのであろう。ここ
にあげた五つの語句は、難解なものではない。「山もと遠き」「は
ら野」「すそ野」などは、文意をたどって読むためにはほとんど注
釈を加える必要はない。しかし「十六夜日記」が書かれた当時、作
者や読者達にとってそれぞれのことばがどのような意味を持ってい
たのか、それを解明するのが注釈のあり方としては望まれるのであ
る。

三

関の藤川で阿仏は、

わが子ども君につかへんためならでわたらましやはせきのふち

「十六夜日記」論 — 注釈の方法に触れつつ —

河

と詠んだ。為相らが歌道を以て天皇に仕えるようにと、辛い関東へ
の旅を続けるのである。名所・歌枕を歴訪する形ではあつても、旅
愁と郷愁の思は全体にただよっている。そして、目につくのは訴
訟勝利祈願の歌の多きである。むすぶの神の社では、

まぼれたゞ契むすぶの神ならばとけぬうらみにわれまよはさきで
と思ひ続け、尾張一の宮では、

一のみや名さへなつかしふたつなくみつなき法をまもるなるべ
し

熱田の宮には五首の歌を奉納（一首を示す）。

いのるぞよわがおもふことなるみがたかたひくしほも神のまに
く

三島明神にも次の歌など三首を奉納（一首を示す）。

あはれとやみしまの神の宮ばしらたゞこゝにしもめぐりにけ
り

計十首が祈願の歌であつた。また、清見が関で、岩を越す波を白
き衣と見たてた、

清見がた年ふる岩にこゝはん浪のぬれぎぬいくかさねきつ
のような歌もある。訴訟問題では為氏側からの反論・中傷は当然激
しかったはずで、その内容の一端は「源承和歌口伝」からも想像が
つくが、自らも濡れ衣を着つけ、いつ晴らせるかという思いがこ
の歌の根底にあることは確かである。こうした歌が道の記の心情の
基調となつていふことはいふまでもない。

道の記の部分の執筆目的が名所の歌のよき見本を作ることにあつ

たのだとすれば、序の部分と道の記とは完全に乘離したものに
てしまう。しかし、道の記を貫く心情は序を承けたものであり、文
章にも工夫がこらされていて、本来は読者を飽かせることがなかつ
たのである。

『十六夜日記』の現存諸本の多くは、この歌に鎌倉潜在記といわ
れる部分と、鎌倉へ着いて四年めの春に鶴岡八幡宮に訴訟勝利祈願
のために奉ったと思われる長歌とを載せている。本来これらが一つ
のまとまった作品として企図されたものかどうかにはいくつもの考
えが出されている。それらの紹介と検討については江口正弘氏に周
到な御論があり、それに譲りたいが、江口氏の結論にもあるように、
鎌倉潜在記までは第一次の成立と見てよいだろう。潜在記の部分は、
関東の阿仏に心を寄せ、気づかってくれる人々との消息の贈答を中
心にして成り立っている。それらの人々について「さきの右兵衛の
かみためのりの御女歌よむ人にて勅撰にもたび／＼入給へり」とい
った人物紹介がついているのが目につく。「くはこくもん院の新中
納言ときこゆるは京極の中納言定家のむすめ……」といった説明を
読めば、この部分で予想されている読者が為相たちでないことはも
ちろん、為相周辺の都の人々でないことはすぐにわかる。こうした
人物説明が必要な読者はまず関東の人々だと考えてよいだろう。序
のあの強い調子の主張も明らかに他への訴えて「女子はあまたもな
し。たゞひとりにてこのちかき程の女院にさぶらひ給ふ」などの説
明から見ても、彼女と親しい人ばかりへの訴えではない。おそらく
『十六夜日記』は、鎌倉幕府に関わる人々をも視野に入れ、訴訟の
よってきたるところや自己の立場を強く訴えかける意味をもってま

とめられたのであろう。それは強い自己主張であると同時に、その
主張の正しさを裏づける実践でもあった。定家・為家の家学・歌道
の継承を自負する以上、その作品が凡庸なものであってはならなかつ
た。歌に力点を置くのはもちろんのこと、文章の細部にまで周到
な工夫をこらして書くのは、けだし当然のことであった。その工夫
は時代を隔ててわれわれにはよく見えず、また、筋を追いつめて
文章を読み味わう／＼ことの少なくなった鑑賞のし方が、この作品
の理解を妨げているのではあるまいか。

注1 片桐洋一氏「拾遺和歌集の研究本文篇」

- 2 「播磨国細川荘訴訟裁決状」の句（藤本孝一氏「荘園と冷
泉家」八冷泉為任氏監修「冷泉家の歴史」所収より）
- 3 「阿仏尼の文学」（国語と国文学 昭和4年10月）
- 4 3に同じ。
- 5 「旅する女たち」（国文学 昭和53年3月。「芭蕉の内な
る西行」所収）
- 6 「新古今集各所歌目録稿」（跡見学園国語科紀要20 昭和
47年3月）
- 7 「中世女流日記文学の研究」本論の第二章の三
- 8 底本「奉る歌五」とありながら記載歌は四首。九条家本等
三本に五首ある。
- 9 「十六夜日記の伝本と成立について」（国語と国文学 昭
和47年7月）